

---

# ハート・ビート

青木 光

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハート・ビート

### 【Nコード】

N4654L

### 【作者名】

青木 光

### 【あらすじ】

新中学2年生の葛城宗太<sup>かつらぎ そうた</sup>に義理の妹が出来ます。

その彼女に巻き込まれる葛城宗太の生活を描いています。

第二話から登場予定です。

## 0ビート プロローグ

僕の名前は葛城宗太。かつらぎそうた

身長163cm 体重43kg 成績はオール3 7月11日の蟹座生まれ という感じで14歳の普通の新 中学2年生だ  
- - - いや、だったの方が厳密だろう。

彼女が来るまでは・・・。

僕の父、葛城謙蔵かつらぎけんそうは会社をいくつも持っていて、社長ということもあつてかいつも偉そうにしている。

母、葛城眞理子かつらぎまりこは元・ハリウッドで女優をしていた。僕を生んでからは普通の主婦になつたらしい。

こんな両親なので僕の家は自分で言うのもなんだがすごく金持ちだ。300坪の土地、一部屋畳42畳半ある、そして家の近くにある小屋(?)には小さい頃から父に絶対に入るなと言われているから入ったこともないし気になるとも思わない。

あ、それと僕の自己紹介にもう一つ加えたいものがある。

僕はオタクだ。

もの凄くサラッと言つたが結構めり込んでいる。

部屋に引きこもってネットをやりたいのは山々だが一応、高校にも行くつもりだし、何よりオタクだと思われたくないというのが本心だろうか？

友達はいない。可愛いな、と思う人はいても好きな人はいない。

勿論、彼女もいない。

部活にも入っていないし、趣味もない、まあ言うなら二次元か。

初めまして、青木 あおき 光 みつ と申します。

分かつてはいましたが小説をかくのは難しいですねえ……

もしよければ感想などお願いします。

これから宜しくお願いします。

あ、僕一応男の子です（笑）

## 1 ビート 初めて

朝、洋風のベッドから起きて三階から一階のリビングまで階段を下りて行き、母と一緒にトーストと目玉焼きとミルクティーというごく普通の朝ご飯を食べてるとTVから占いが流れた7:00のことだ。

「今日の蟹座はあゝ・・・」

めんどくさい占いだ、と思い待っていると。

「2位でえす」

バカっぽい喋り方だな。

ん、2位か。たまに占いを見る時に限って順位はかなり悪いのに今日は2位か・・・

なんか変だなと思いながら登校をした。

学校でも窓側の席についたら小説を読み（もちろん二次元の）、一時間目が始まって早く終わらないかな、と上の空。

先生とも全然喋らないから、授業でもあてられない。

いや、あてられたことがない。

そんな生活の8年目を向かえようとしていた、5月2日初めて先生に当てられた。

「おい、宗太 この問題、解いてみる」

数学の岡辺<sup>おかへ</sup>先生だ。

「え？あ、はい」

初めてのことで一瞬パニックだったが、すぐ立ち上がり。

「えつと、 $a \parallel 2m - b$ です」

といい座った、先生はそんな僕を見て。

「よし、ボツとするなよ？」

と軽く言い、また授業が再開された。ボツしてるのは毎日だろ、

何を見てるんだコイツ。

と思いながらも、また初めてが起きた。

昼休み。

席でいつも通り小説を読んでいると

「それ、何の本？」

と誰かが話しかけてきた。

「ん？ただの・・・」

授業中でも可愛いな、とたまに見て思っていた富山<sup>とやま</sup>麻理さんだ。

髪は長めで身長は僕より少し低いくらいだろう。

二次に出てきてもまったく問題ないくらいかわいい。噂だと、どんな人が告白しても振るらしい。

なんか好きな人に告白されるのを待ってるんだとか。

「ただの？」

小首をかしげてきた。うむ、かわいい。

考え事をしていた。答えなくては。

「・・・ただの小説だよ」

と言うと富山さんは

「ふゝん、今度私にも見せてね？」

と言ってきた。予想外だ。

「あ・・・はい」

「じゃーね」

と言い廊下に行ってしまった。

ヤバイ・・・惚れてしまったかもしれない・・・人にはめったに話しかけられないはずの僕が話しかけられた。それも気になっていた人に。

今日三つ目の初めてが起きた。

家が見えてくると馬鹿でかい玄関（つてカ門）からリムジンのような車が去って行った。

夜中に父が部下のような人達を連れてきて静かにゴソゴソ部屋何かにしているのは何度かある。

母が見送りなんてしたのなんて初めて見た。

「あら宗太おかえりなさい」

「母さんただいま」

「うん」

おやつでも食べてさっさと二次の世界に行くか。

あんなことが起こるなんて、思ってもいなかった。

[illegible]

[illegible]

どうも青木 光です。

一話が終わりました。

何か下手くそですみません><

タイトルの1ビートというのは1話と同じ意味です。

ハートビートの意味は胸の鼓動という意味で、恋をした時のドキドキを表してみました。

次から研究しもつと上手く打てるようになりたいと思いますので宜しくお願いします♪

## 2 ビート 衝撃

母に連れられバカでかい門を開け中に入るといつも通りのシャンデリアが天井にあり玄関に靴を並べ上がると見慣れた狒犬が二匹こちらを見ている。

この狒犬は母が大の犬好きで

「各部屋に1匹は人形か何か置きなさいよ？置かないと許しませんよ？」

と言われ仕方なく僕の部屋にも1匹チワワという犬種の犬の小さい銅像が机の上に置いている。

母に「じゃあ部屋にいるね」と言い3階にある自分の部屋に行き制服を脱いで机の上に置いてある机に向かった。

電源のボタンの上に手を置いた時ふと思った。

さっき門の前にいた車は何なんだったんだ？

まあ、どうせ客だろ。と思い気にせず電源を入れた。

そして興味を持っている漫画を調べていると。

(・・・・・・やっぱり面倒くさいけど聞きに行くか・・気になるし)

僕は一度気になると知らないといられない男なのだ。

そういう意味ではパソコンはやはり手放せない。

下に取りて行き母を探す。

リビングにはいない滅多に外に出ない人なので庭とかにはいないだろう。

二階のリビングか？いやあの人は面倒くさがりやだし二階まで上がることはないだろう。

リビングは1階2階と二つある。

ってことはやはり1階か？と思い広いフロアを必死に探す。

後、捜していない場所といえば・・・足が勝手に動きその場所まで行くそこはトイレの前だった。

おおっと僕は考えているんだ、僕はバカか？

たまに自分がわからなくなる。

ソファ―に座り考えていると。

心なしか水の音が聞こえた様な気がした。

あ  
あ  
・  
・  
・  
・

扉が閉まる音がした。

あのまま開けようとしたらとんだ笑い者になるところだった。

母が僕に気づき

「あら。いつも部屋にいるのに珍しいわね？」

そりや毎日変わりのない日々ですから……。

「あ、うん。母さんに聞きたい事があるんだけど」

「あら、何かしら？」

僕は本題に切り出した。

「さっき来てた車お客さん？」

「ああ。あの車ね。ごめん宗太言うの忘れてたわ。」

# h?

「あなたに妹が出来るから」

「ほえ？」

「何あなたマヌケな声出してるのよ」

「そうだよな」

八八八八八八

笑いがリビングに響く。

[illegible]

! ! ! ! ! ! ! ! ! !

驚きが家中に響いた。

どうやら母を尋問しなくてはならないらしい。

[illegible]

こんばんは、青木  
光こうですっ

すみません調子乗りました。

妹キャラを二話登場予定だったのでですが延ばさせて頂きますすみません；

3話4話登場予定です；

では宜しくお願いします♪

### 3 ビート 発覚

「で？何だって？」

僕は母をソファーに座らせ事情聴取を取っていた。

「あ。はい。え〜と〜・・・」

こういう時は乗りやすい母だ。

母の説明を受けている間に僕が説明しよう。

父の会社の副社長が出張先で事故にあつたらしく2年間入院をする  
そうでその間預かるらしい。

この副社長は結構歳もいつていて元・社長だったが、父が蹴つて社  
長になつたらしい。

なんておやじだ。

そして次に気になることを聞いてみる。

「その子いつ来んの？」

「え〜と確かあ・・・5時半だったかな？」

今は・・・

「つてうおおおおいいいいいい！！！！今5時だろ！！！！  
何を考えてるんだアンタはあ！！？」

「あら。ホント、もう5時だね。迎える準備をしなきゃ。という事  
でさよなら〜」

「おい！！」

母はすごいスピードで去つて行つた。

一番やめてほしいのは女の子が来る事だ・・・が義理の妹が出来る  
らしい。

女の子が来るのは嬉しいが女の子とは全然喋ったこともないし何よ  
り女の子の考へてゐることはホントにつかめない。

しかも全然知らない子がいきなり妹になるんだ戸惑うのは当たり前

だ。

向こうも同じ事を思ってると思うけど・・・。

それに何よりこんな言い方はアレだがどうせ義理の妹が来るなら美少女がいい。

そんなことをいつまで思案していてもどうにもならない。

こういう時どうすればいいのだろう？

今、5時14分。

時刻ピッタリに来たとしたら後16分。

そんなことを考えていた時。

「ウツ。お腹が痛い。そういえば朝トイレへ行ってなかったな・・・ト、トイレ。」

トイレに入って用を足していると。

車の音がしたような気がした。

(まさかな・・・)

そのすぐ後チャイムの音が鳴り響く。

「ハイハイ」

母の声。

(嘘だろ・・・)

時計を見ると5時26分まだ4分もあるじゃないかあ

まあそんなピッタリこれる人はいないと思うが・・・

(早く出なければ)

レバーを回し水で流した。

すぐさま玄関に向かって行くと。

まるで執事のような人が二人ほど母と喋っていた。

その内の60代くらいの小柄の人がこちらに気付き

「あなたが宗太坊ちゃんでしたか紹介遅れて申し訳ございません執事の稲葉 護持と申します」

「護持さんですか珍しい名前ですね？」



[illegible]

とも青木 あおき 光 みつ です。

[illegible]

## 4ビート 一目惚れ

夕方の光の中、彼女は部屋の入り口に立ち尽くす僕を見てこちらに走ってきた。

「あ、はじめまし・・・」

「変態」

ん？何か聞こえたような気がするな・・・

え？変態？

彼女はすれ違い様にその一言だけ言ってどこかへ行ってしまったようだ。

僕はすぐさまパソコンに映っている画面を見た・・・ぎゃああああああああああああ

なぜ今日の僕はこんな日に「おまも。ひまり」の画像（ヤバ系）を見てしまっていたんだああああ

ああ。もの凄く優しく真面目なお兄ちゃんを演じるつもりだったのにいいいい・・・。

とにかく誤解を解かなくては！！

僕は彼女を捜して家の中を探し回った。

リビングに行ってみると執事の方二人と母が三人で紅茶を飲みながらお話をしている所だった。

「あの子見てない？」

と落ち着いた感じで言った。

「お嬢様ならお庭で見られましたよ」

すると執事の稲葉さんが答えてくれたので

「ありがとうございます。」軽く一礼して庭に向かった。

彼女はすぐに見つけた。

緑の庭の中に銀髪の少女がいたら見つけるのはさほど難しくはない。  
今気付いたが何て誤解を解こう。

まあなせばなる！！！！

僕の座右の銘だ。

彼女の方に駆けていくと彼女はすぐに気付きあ、と言葉をこぼした。

「えっと・・・さっきのはごか」

「変態お兄ちゃんだ」

つてオイ、いきなり心折れたぞ。

「さっきのは誤解なんだよ誤解。僕があんな画像を見ると思っ？変  
な所に間違って入っちゃったんだよ」

これで解けるだろうか？

「だって履歴見たらあんなのばっかりだったもん」

「何回も間違えちゃったんだ。テヘ」

何て賢い妹なんだ。履歴まで見られるとは・・・っていうか僕何「  
テヘ」」とか言ってるんだよアホだろ。

「可愛くないよ？」

わかってるよおおお

「今のは成り行きで・・・」

「成り行きでああいうこと言っただ・・・」  
うつ。逆効果だったか・・・ひかれたぞ。

「と、とりあえず中に入らない？何かお話しようよ、ね？」

彼女は嫌々小さく頷き中に向かった。

玄関で靴を脱いでいると、リビングが近いせいかリビングから声が  
聞こえた。

「実は・・・お嬢様にはお兄様がいらしたのですが実は陰でお嬢様  
に暴力を振っていたみたいでそれ以来お嬢様は年上の男の方が苦手  
になってしまったようで・・・」

僕は彼女の方を向くと彼女は立ちながら下を向き、また外へ飛び出してしまった。

すぐ僕は追いかけた。

だがすぐ見つけられた。

ジェット機の中に一つだけ気球が混ざってるくらいなもんだ。

庭の真ん中にある、噴水の近くのベンチに彼女は座っていた。

僕は近づいて行き静かに隣に座った。

すると彼女は誰かに語り出すかの様に喋り始めた。

「私のお兄ちゃん学校が嫌いだね？学校で嫌な事があると家に帰ってきて私の部屋に入ってきてはたかれたりしたの。」

彼女の大きな瞳は大粒の涙が零れ落ちそうだった。

「お母さんもお父さんも仕事でいなかったし執事さんになんか言えなかつたし言ったらもつと酷いことするぞって言われて怖くて・・・」

・  
・

彼女の白い足に涙がこぼれた。肩も震えてもう見てはいられなかった。

寒そうに露出している両肩に自分のジャンパーをかけてあげて彼女の右肩に手をまわし胸にギュッと抱き寄せた。

彼女はビクリしたのかこちらに顔を向けた。

「たくさん辛い思いをしてきたんだね。でももう大丈夫だよ？僕が守るからね」

彼女は更に涙を流した。

僕は右手の人差し指で涙をふき取り声をかけた。

「そんなに泣いてちゃ折角の可愛い顔が台無しだよ？ほら笑って？」

彼女は少し微笑みうん、と頷いた。

家の中に入る頃にはもう日は落ちていたが僕と彼女の胸には光が灯っていた。

- - - - -



## 5 ビート 扱い

家の中に入ると執事の2人は帰っていた。

それから僕は母に言われ彼女に家の中を紹介していた。

そういえば……

「そういえば名前は何て言うの？」

大事な事を聞くのを忘れてた。

「柊 咲姫はなこっていいいます。宜しくお願いします。」

ウツ、なんかかたいな。

「もつとくだけていいんだよ？妹になっただから」

「ああ……そうだね、妹になっただもね。ごめんねお兄ちゃん」

とびつきの笑顔をこちらに向けてくる。

ああヤバい今ちよつと顔が赤くなっただかもしれない。

「ちよつとやだお兄ちゃん義理って言っても一応妹だからねっ

！何考えてるのよっ！」

「いや別にそういうわけじゃ……」

こんなに可愛い子のあの笑顔だ……ときめかない筈がない。

「僕は何て呼べばいい？」

「んゝ別に咲姫さきでも何でもいいけど？」

「じゃあ……咲姫」

「なゝに？お兄ちゃん？」

また凄い笑顔、一瞬目が吹き飛びそうになっただが抑えた。

そして一通り家を見て回ってる中

「宗太ゝ咲姫ちゃんゝご飯が出来たわよ」

母に呼ばれ

「じゃあいこっか咲姫」

「うん！」

2人はリビングに向かった。

3人で夕食を食べていると思った。

「そういえば咲姫は僕より歳一つ下だよね？ってことはどこの中学行くの？」

「お兄ちゃんと同じとこだけど？？」

「ああ・・・そうなんだ・・・」

僕の青春時代はバラ色になりそうな気がした。

咲姫と母が喋ってる中、夕食を早く食べた僕は「ごちそうさま」といい2人が喋ってる中3階の自分の部屋に向かった。

部屋の中に入ると奥にある筈のベッドがなかった。

あれ？と疑問に思い下を見ると布団が二つ並んで置いてあった。

「あの野郎オ！」

僕はすぐさまりビングに戻る

「ちよつと母さん！？ベッドが布団になってるし、しかも二つ並んでるんですけどぉ！？」

「あら」「何か変？」

最後だけ2人で言われた。

「いや変だらけだろ！？年頃の2人が一緒に寝るってオカシイだろ！咲姫は何納得してるんだよ！」

「あら何かする訳でもないしいいでしょ？」

「そつよ。お兄ちゃんエロい。」

いや。おかしいだろ。

「普通、咲姫は客間に寝かせるだろ！？何考えてんだアンタはあ！？」

「だって咲姫ちゃんが一緒に寝たいって言うてるんですもの」

「あああもういいよ！」

うちの家にまとも人間はいないらしい。

部屋に入ると右側の布団に横になった。

（今日は色々と疲れたな）

そんな事を考えているうちにすぐ眠りについてしまった。

パチツ

目が覚めた。

枕元にある目覚まし時計を手にとり時間を見た。

(12:30 何か目・覚めちゃったな・・・)

ごろんと寝返りをうち右側を見ると

ぎゃあ  
ああ  
ああ  
ああ  
ああ

――と声に出しそうになった。

そりゃあそうだよ、目が覚めて隣を見ると美少女の寝顔があるんだから。

咲姫は隣の布団の中で眠っていた。

可愛いなあと思っていると、咲姫が急に動き目を覚ました。

僕は反射的に寝たフリをした。

「お兄ちゃん？起きてる？」

小さい声で囁いてきた咲姫。

「ああさつき起きた」

「今日……寒くない？」

「ん？そうか？だいぶ暑くなってきたと思うが」

もう5月だ暑くはなっ  
てきている。

「いや寒いのっ！……だから一緒に寝ても……いいかな？」

「あ、うん」

あ、つい言ってしまった。

「やつた」

咲姫は僕の布団の中にもぞもぞと入ってきた。

「おい咲姫。いつたい何を考えてるんだ」

「いいでしょ。私のお兄ちゃんだから」と咲姫は顔を赤らめ言った……かわいいiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii

失礼。

「変なことしないでよね？」

厳密に言うところ「したいしたい」だ。

だが男なら誰もがこの状況にt（ry

「あ、うん。お休み」

嬉しいがちょっとヤバイ・・・

そんなことを思いつつうちに寝てしまった。

彼女の無邪気な寝顔を見ながら。

-----

— — — — —

-----

-----

どうでしたか？

その5行前に出てきた「だが男なら誰もがこの状況に立たされたら

わかりにくくてすみません。

ではありがとうございましたっ ♪



## 6 ビート 転校生

金曜日の朝、目が覚め時間を見た。

（6：30か・・・起きるか）

軽くのび、起き上がった。

隣を見ると咲姫はまだあどけない顔で寝ていた。

咲姫を起こさないように静かに歩き下に向かった。

リビングに行くと母は台所で朝ごはんを作り始めていた。

「おはよ〜」

「宗太おはよう。」

毎日の何気ない会話を交わしソファーに座りTVを見ていた。

「そういえば父さんいつ帰ってくるの？」

「ん〜わかんないけど来週には帰ってくるんじゃない？」

「そっか」

父さんはいつもよく出張やら会社に泊まりこむやらで家を空ける事が多い。

1時間近く経ち。

「咲姫起きてこないね」

「そのうち起きてくるんじゃないかしら？」

咲姫は結構ねぼすけのようだ。

「ハイハイ今日の蟹座の運勢はあ〜〜〜」

出た。

「あら。宗太の出るわよ？」

「あっそうだね」

TVは見てたから僕の発表だってことは分かってたけどなんとなくとぼけて（？）みた。

「7位でえ〜す」

微妙だな、うん。

「続いて乙女坐の運勢うわあ~~~~」  
この喋り方なんだ。

「1位です！おめでとうございますキラリン体操始め！」

この番組は「キラリン！」順位発表もバラ「キラリン！」バラだしそれに1位が出「キラリン！」るとキラリン体操という「キラリン！」意味不明なダンスをしは「キラリン！」じめるから嫌いなんだ「キラリン！」よな。

ほら「キラリン！」うつとうしい。

「やったわ。私1位だわ」

「そういえば母さん乙女座だったね」

「そうよ。私にピッタリの乙女座ちゃんよ？」

いい歳して何言ってるんだよ、オバサン。

「あつそろそろ行くね？」

時間も時間だ、玄関に向かう。

「んじゃ、いつてきまゝす。」

そう言つて家を後にする。

学校に着くとすぐ席に着き荷物を整理してから毎日の日課になっている小説を読み始めた。

「――美少女――――」

僕の耳が美少女と言う言葉に反応しその言葉を発した生徒の方に耳を傾けた。

「なんかさゝ1年にめっちゃ可愛い美少女が来たらしいよ」

「まじかよ。後で見に行こうぜ」

美少女か。

後でさりげなく見に行つてみるかな。

ホームルーム

HRが始まると担任の国語の石田先生が

「みなさん今日は昨日言つた通り席替えをします。これから周りま  
すのでくじを引いてくださいね？」

ああそういえば昨日なんか言ってたな。

今の隣の奴はいかにも普通の女子って感じの人だ。

席は出来ればここがいい。

ふたともこ

隣は誰でもいいが太田桃子こいつの隣にだけはなりたくない。

太つてて。うるさくて。男子の間で嫌な女子NO.1だ。

そんなことを考えていると先生が目の前まで来ていた。

「では宗太君？引いてください」

「あ、はい」

えつと6番か。

黒板に書いてある座席表で席を見る・・・お！ここじゃん。

僕の（？）特等席の窓側の一番後ろの席。

何か落ち着くんだよな。

「はい！でわ皆さん引きましたね？黒板に書いてある座席表を見て席を移動してください」

みんなが移動し始める机を引きずる音や喋り声が耳に入ってくる。

さて、隣は・・・と。

「うわ。宗太じゃんマジ嫌なんですけど・・・！！！」

出たよ太田。

つてカお前だけには言われたくねえよ。

・・・終わったな。

「あれ？私も6番みたい」

それから太田の声。

「あつこれ逆さまだつた・・・9かよ！宗太先に言えよな・・・！！」

意味わかんねえよデブ。

まあ助かったよ。

どれどれ隣は？

「よろしくね宗太くん」

あ・・・・・・キタキタキタ (。 。 ≡ (。

。≡。。)≡。。) !!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

隣は長くて綺麗な黒い髪をした富山麻理さんだ。とやままり

いつ見てもかわいいなあ。

「あ、あ、うん。そう言えばそうだね」

あの小説のお陰で俺は富山さんと喋れる機会が一つできた、あの小説買って良かった。

# ん?

「放課後に体育館のう・・・」

・  
・  
・  
しいの!  
」

「い、いいの。別にまた今度で・・・」

いつもは早く終われ！と思っていた50分授業が今日だけ55分だったらと今、僕は初めて学校を恨んだ。

眠かったのでその日は寝てしまった。

良いことが起きるといいな。

[illegible]

- - -  
どうも青木<sup>あおき</sup> 光<sup>こう</sup>です。

どうでしたか？

今日は席替えを題材にしてみました。

僕の学校でもついこの間席替えがあつたんですが、隣は・・・まあまあでした。

好きな人は違うクラスなのでなれませんが・・・おおっとここからは秘密ですっ（笑）

ではまた明日！  
♪

## 7ビート 二つの約束（前編）

富山さんにせがまれ仕方なく（？）携帯の電話番号&メルアドをGETした僕。

僕からしたら超ラッキーだけど。

あの富山さんが何故僕なんかに番号交換したんだろう？

土曜日に咲姫は早速友達を連れてきた。

咲姫は部屋に入ってきて

「お兄ちゃん友達連れてきたよ」

すると背の高めの女の子が挨拶をしてきた

「え、えつと高田羽海たかだつみと言います。よ、よろしくお願いしましゅっ

！」

「あ、よろしく」

どうして挨拶を交わしてるかわからない。

ただの妹の友達なだけなのに。

「お兄ちゃん、何か羽海がメルアド交換したいんだってさ」

「え？僕と??」

オイオイ。

「あ、はい！べ、別にそういう訳じゃないですよ！？咲姫ちゃんと連絡が取れにやい時に連絡したらわかるかな」って思っただけでしゅからね！？」

かみかみだよ。

「いや別に僕はいいいけどさ。僕なんかでいいのかな？」

「ぜ、全然かまいませんん！！」

「と、とにかく落ち着いて」

フ・・・モテ期到来か。

メルアドを交換した羽海ちゃんと僕、羽海ちゃんは妹の部屋に向かった。

「あ、お兄ちゃん明日日曜日だし街にお買い物一緒に行かない?」  
明日か別に用事はないし。

「あ、いいよ行こっか」

「あ、うん。それだけバイバイ」

そう言つて向こうに行つてしまった。

それから30分くらいしてから携帯が鳴った。

(ん。咲姫からか)

「明日は1時に渋谷のハチちゃんの像の前に現地集合ね!遅れたら怒っちゃうんだからっ!」

ハチちゃんねえ

「りょーかい」

と返事を返した。

その日は咲姫とは会わなかった。

夜、22:00頃、携帯が鳴る。

(誰だ?・・・富山さんだ!)

超嬉しい・・・。

何々?

「明日の1時頃、渋谷で会えませんか?」  
場所等が詳しく書かれてある。

その時の行動は後悔することになる。

「いいですよ明日1時に行きますね」  
ん?何か忘れてるような?・・・まあいつか。

その次の日。

12:30に家を出た。

富山さんが言っていた場所に向かって歩きだす。

12:55分、待ち合わせ場所に着くと富山さんはまだいなかった。その6分後くらいに富山さんが走ってきた。

「ごめんなさい……！服を選ぶのに手間取っちゃって……」

「いや大丈夫だよ今来たばかりだし、それに女の子の服は凄く大事だもんね」

「あ、ありがとうございます」

富山さんは清楚な白のワンピースに靴はパンプスを履いていた。いつ見ても可愛いなあ。

「どいっつか？」

「あ、お買い物付き合ってくださいませんか？」

「あ、いいよいいよ」

富山さんに連れられ歩き出す僕。

# h?

渋谷？1時？お買い物？

何か忘れてるような……。

「宗太くん。はやく〜」

おっと

「あ、はい」

まあ思い出した時でいいか。

それから30分後。

携帯の着信が鳴る。

（お、電話か）

咲姫からか。

え？

[illegible]

咲姫とも約束してたんだっ  
たあああ  
エエエエエエエエエエ

エエエエエエエ（。ん）ノエエエエエエエエエエエエエエエエ  
イコツチャアア！！！！

僕は静かに携帯を取り出し電話に出る。

「も、も、も、もしもし？」

「ちよつとお兄ちゃん！？遅刻してどうしたのよ！！」

「あ、ごめ・・・」

「心配・・・しちゃったじゃない・・・・・・」

罪悪感におわれる僕。

「ホントごめん！！今日は行けなくなっちゃったんだ・・・今度また何かで埋め合わせするから今日はホントごめん！！」

「別に今日はいいわよ。今日は羽海呼んじやったし・・・今度忘れたらもう知らないからね！」

「ホントごめ・・・」

ブチッブチッブチッブチッ

切られた。

次忘れたら・・・。。。

「宗太くんどうかしたの？」

「い、いや何でもないんだよ。間違い電話だったみたい」

「何か謝ってみたいけど？」

「え？そう？・・・あ！これ似合うんじゃないかな？」

話を逸らす僕。

それから2時間半後。

メールが来る。

羽海ちゃんからだ。

「宗太さん助けてください！！今人気の無い所を二人で歩いてたら20歳くらいのお兄さんに絡まれて、咲姫ちゃんが危ないんです！今すぐ来てください！」

場所が細かに書いてある。

「あ、富山さん？」

「はい？」

「ごめん急用ができちゃった。ちょっと行ってくるね。この埋め合  
わせはまた今度するから！！」

僕は返事を待たずに走り出した。

あそこまでなら走って10分くらいで行ける・・・待ってるよ・・・  
・・・咲姫。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

どうも青木 光あおき こうですつ。

どうでしたでしょうか。

後半に続きます。

初めての続ありにしました。

コメント等待ってます。

ではまた明日！

## 8ビート 二つの約束（後編）

走って、走って、走って。

羽海ちゃんに教えてもらった場所に向かう。

「くそ・俺が咲姫との約束を破らなければ……!!」  
そう小さく呟き僕は走る。

約10分後、言われた場所に着いた。

「いいじゃねえかよぉ」

奥からは何か声が聞こえてきた。

暗い路地が奥へと広がっている。

横幅5mと行ったところか。

僕は奥へと向かった。

少し行くとすぐ視界に入った。

若めの男が咲姫の腕を掴みどこかへ連れて行こうとしている。

羽海ちゃんが必死に止めている。

よし・行くか。

足が……動かない……。

助けには行きたいが恐怖で足が動かない。

とりあえず

咲姫たちから目に入らない側にある自動販売機の陰に座り込む。

何か……武器……!

側には棒になるような物はない。

置いてあるのは空き缶一つだけ。

もう奇襲しかないか……。

空き缶を手に持ち、陰に隠れ見えない様に思いっきり向こうに投げた。

カランカランという音が響く。

「ん?なんだ?」

男が向こうの路地を見る。

これで背中をとれる。

僕は男に向かって走っていった。

喧嘩には自信があった。

小学生の頃から「お前オタクなんだろう？」

と心ない言葉にからかわれいじめられていた。

それと戦うため我流で喧嘩を研究した。

一つ上くらいなら2人3人なら相手を出来る自信はある。

だが相手は思いつ切り年上。

8つ・・・いや下手したら10くらい違うかもしれない。

そんな年上とやりあうのは初めてだが、そんなこと言ってるんじゃない。

第一、俺のせいだし。

僕は思いつ切りその男の背中に跳び蹴りをした。

男は倒れ込む。

あゝあ、やつちゃったな。

うつぶせに倒れた男にのり、押さえ込む。

「咲姫！羽海ちゃん！逃げるんだ！！早く！！！！」

後ろを振り向き咲姫たちの顔を確認する。

羽海ちゃんは咲姫の肩に手をまわし宿めていた。

咲姫は少し涙を浮かべていた。

当たり前か・・・。

「は、はい・・・」

羽海ちゃんが返事をして連れて行った。

「テメエこのガキい！」

思いつ切りふりほどかれた。

男はすぐに立ち上がる。

「テメエ覚悟は出来てるんだよね？」

指をバキバキとならす。

「元凶はあなたでしょう？わからないんですか？精神科でも行ってきたら？」

あゝ挑発しちゃった。

今のは羽海ちゃんに分。

「後・・・」

これは・・・

「二度と人の妹に手だすんじゃないやねえっ！」

「・・・咲姫の分だあ！！！！！！」

思いつ切り左頬を殴った。

五分後

警察が来た。

男はそれを見るとすぐ逃げて行った。

咲姫と羽海ちゃんが近づいてくる。

「うわあ凄い怪我！大丈夫ですか！？」

「お兄ちゃん大丈夫？？」

優勢に立ったのは最初の跳び蹴りと殴ったのだけでその後はボッコボコにされちゃった。

やっぱ無理だったか。

「これで血拭いてください。」

羽海ちゃんがハンカチを傷口に当ててくれる。

「イテテテテ」

あの野郎思いつ切り殴りやがって。

その後警察に事情聴取を取られ返された。

その帰り道。

羽海ちゃんは家は別の方の道なので帰ってしまった。

ねえお兄ちゃんと言われ僕は咲姫の方を向いた。

すると咲姫は泣きだした。

「ごめんねお兄ちゃん・・・私のせいで・・・」

「い、いや咲姫は悪くないよ！元は僕のせいだし・・・こっちこそホントごめん」

そうして家に帰って行つた。  
家に帰つた僕は母にたくさん色々なことを聞かれた。

・・・お風呂入るとき・・・痛ぞ。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

どうも青木<sup>あおき</sup> 光<sup>こう</sup>です。

嬉しい事が二つつありました。

一つ目はこの小説をお気に入り登録してくれてる方がいらっしやいました>|<

ホントに嬉しかったです。

お返しに向かいたいのですが誰が登録してくれたのかわからないのでそれを見る機能はあるのでしょうか？

もう一つはアクセス数が日に日に上がっていることです。

どちらも本当に嬉しいです。

ホントありがとうございます。

こんな僕ですがこれからも支えてやってください。

お願いします。

ではまた明日♪



## 9 ビート 疑い (前編)

母に散々あれこれと聞かれ、お風呂に入った。  
勿論ビリビリ痛かった。

夜、部屋にいと咲姫さきが入ってきた。

「お兄ちゃん・・・」

謝りに来たのだろうか？

「いやもうい・・・」

「埋め合わせは明日してねっ」じゃっ  
ボタン！

扉を思い切り閉め出て行った。

予想外だな。

あゝ寝るかあゝ今日は何かだるいし。

電気を消し、横になる。

次の日。

俺の安眠を妨げたのは一本の電話だった。

「もしもし？」

「もしもし？私よっ」

「あゝ咲姫か？どした？」

「1時駅前集合ね」

「え・・・おいっ・・・」

「じゃゝね」

ブチッ、プープー

一方的だな

今何時だよ。

12時半か・・・ってギャ

!!!!!!

Σ(。D)ノ

急がなきゃ!!

急いで着替えて家を出る。

自転車にのり駅に向かう。

後30分早く電話してくれたらよかったのに・・・

約20分後。

なんとか1時前に着いた僕。

待ち合わせ場所にはまだ誰もいない。

30分経過。

時計をフ、と見る僕もう1時半だ誰もこない、それになにより腹が減った。

更に30分後。

肩に後ろから手を置かれる。

「おい咲姫おそいぞ・・・」

振り向くと、そこいたのは咲姫の友達うみの羽海ちゃんがいた。ひどく息を切らせていた。

少し待つと口を開いた。

「さ、咲姫ちゃんなんですけど、部活でよ、呼ばれたらしくこっちに來られなくなったそうです」

「そ、そうなんだ」

ちなみに咲姫の部活バレー部らしい。

「わざわざ教えてくれてありがとね羽海ちゃん」

出来るだけ笑顔を作って頬笑みかける。

そりゃそうだろう。

折角わざわざ教えに來てくれたのに嫌な顔して言われても困るだろう。

「い、いえ当然のことをしたまです」

顔を少し赤らめている様な気がしたが気のせいだろう。

「これからどうしよつか？折角來てくれたんだからただで返す訳にもいかないよね」

「い、いえ！全然そんなのいりませんよ・・・？」

何かお礼が出来ないかと思いを悩ます。

腹減ったなあ・・・ん？

「そういえばお昼もう食べた？」

「いえ・・・ま、まだです」

「じゃあ、あそこで食べよつか」

僕はついてきてと言いい無を言わず先導した。

店は僕の大好きなハンバーガーショップだ。

「羽海ちゃんは何食べる？」

「じゃ、じゃあチーズバーガーをお願いします」

「うし」

店員さんにチーズバーガー二つとコーラ二つを頼み席に着く。

羽海ちゃんは何か言いたげにしていたがすぐに口を開いた。

「本当にありがとうございます、お金も持ってきてなくてお金も出せないし・・・」

「いやお礼を言うのはむしろこっちの方だよ。それにお金を出すのは男の性<sup>さが</sup>っていうかなんていうか」

30分後2人とも食べ終わり外に出た。

「ホント今日はありがとね」

僕は言う。

さよならをし向こうに行こうと振り返りあるこうとすると・・・

「あ、あのー！」

不幸の車輪は回り始めた。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

どうも青木光<sup>あおきこう</sup>です。

どうでしたでしょうか？

次の話は全力全開！したいと思います。

．．．．すみません。

ではまた明日！  
♪

## 10ビット 疑い（後編）

「あ、あの！」

羽海ちゃんに呼び止められ。

「ん？どうかした？」

と返した。

「え、えつとい、家に……」

「家に？」

「家に……送ってもらえませんか！？」

「ん？ああいいけど？」

「あ、ありがとうございます！」

そつだよね忘れてたよ。

明るいつて言つたつて女の子が一人で歩くのはまずい。

それにこの前あんなこともあつたしね。

「あ、ごめんね気づかなくて」

「あ、いえ……」

彼女は俯いた。

「さつ、後ろに乗って」

「はい」

羽海ちゃんは自転車の後ろに乗り僕はペダルをこいだ。

途中、急な下り坂があつた。

一度止まり

「羽海ちゃん結構急な坂があるからちよつと掴まつててね？」

「あ、はい」

彼女は腰に腕を回しギューツとした。

かわいい……ハッ！べ、別に嬉しかったわけじゃないからな  
！！

で、でも。む、胸が、あ、当たつて……。

男なら誰でも喜ぶだろうがあ！

僕はそう思う。

それにしてもこの坂。結構長いし急だな。  
軽くブレーキをかけながら進む。

ホントは結構ブレーキをかけていた。

この（胸が当たる）時間を大切にしていた。

それに何かあつてはシャレにならないし。

無事に坂を下り、3分ほど走っていると

「羽海ちゃん？もう手離してもいいよ？」

手を離す気配がない。

とりあえず家まで行くか。

羽海ちゃんの家に向かって自転車を進めた。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

どうも青木光です。

皆様大変申し訳ありません。

誠に自分事で申し訳ないのですが、今日だけPCが使えないということ  
でPSPで投稿することになってしまいました。

時間もあまりなく更に使い慣れていないPSPという投稿で少ししか  
出来ませんでした。><

明日こそ完成させたいと思いますのでよろしくお願い致します。

ではまた明日！

## 11ビート 鼓動

羽海ちゃん<sup>うみ</sup>を家に着き自転車を降りた。  
あつ！

羽海ちゃんは寝てしまっているのか地面に倒れ込みそうになった。  
僕はお姫様だっこをする形で受け止めた。  
だが今度は自転車が倒れてき、足に直撃した。

「いつて……」

羽海ちゃんはパチパチとして目をあけた。  
ハツと気づき

「え？え？寝ちゃって？あれ？あ、ごめんなしい！」

「あ、いいいいいよ。おろすね？」

とりあえず自転車にはさまれている足を抜き羽海ちゃんをおろした。

「あ、あの先輩……ホントすいません」

「ホラ謝ってばっかだといけないよ？笑おうよ？」

「あ、ハイ……すみません……」

「「あつ……アハハハハハハ」」

「あ、あの良かったら家でお茶していきませんか？」

「ん……」

別にいつか。

「うん。頼もうかな？丁度のどかわいたし」

僕は家に入れてもらった。

「キレイな玄関だね」

「母が几帳面なので」

お邪魔しまゝす、と言い中に上がらせてもらった。

ソファーに座って、と言われ座り両親がいないのかな？と辺りを見  
回した。

それに気づいたのか羽海ちゃんは教えてくれた。

「父は出張。母は介護の仕事してて今日は泊まり込みだから一人」  
彼女は一瞬悲しげな顔をした。

「紅茶どうぞ」

いい匂いがする紅茶を出してくれた。

「ありがとう」

一口ズズとそそる。

「あ、おいしいね」

あー眠いな。

「ちよつとだけ横になっていいかな？」

「あ、どうぞ」

「ありがとう」

ソファアの上に横になった僕は眠ってしまったようだ。

目が覚めると部屋は真っ暗で何も見えなかった。

あれ？確か羽海ちゃんの家で寝ちゃったのか・・・。

ブーブーと携帯が動く。

「はい、もしも・・・」

「宗太あ！！！！今どこにいるの！！！！」

母だ酷く怒っているそんな怒ることか？

腕時計のバックアップライト機能を使って時間を確認する。

ゲッ！時過ぎてる。

「あゝごめん、すっかり寝ちゃってたみたい」

「寝ちゃったってどこで！」

「友達ん家」

「せめて家に電話するとかないの！！」

「だってこんな時間まで寝るとは・・・」

「あーもういいわ！今日はもう家に帰ってくるんじゃないわよ！！」

「ってどこで寝ればいいんだよ？」

「そのお友達の家にでも泊めてもらいなさい！」

「ちょっとまつ・・・」

ブチッブチッ

段々目が暗闇に慣れてくる。

どうやら羽海ちゃんが部屋まで連れて来てくれたみたいだ、重かっただろうに。

羽海ちゃんの部屋か・・・いい匂いだ。

僕をベッドの上上げて自分は床で寝てしまったようだ。

起きあがり羽海ちゃんをベッドの上上げた。

幸い明日は何かかんとかの日で月曜日だが休みだ。

あー眠い。

僕ってホント眠たがり屋だよな。

小学生の時は帰ったら寝ていた記憶がある。

寝るかな、母には明日謝るとするか、それにしてもつか・・・かーかー

- - -  
- - -  
- - -  
- - -

どうも青木光です。

どうでしたでしょうか？

感想などお待ちしております。

ではありがとうございました

また明日



## 12ビット 最低

朝、目が覚めると羽海ちゃんうみの部屋の床で寝ていた僕は体を起こしベッドを見た。

羽海ちゃんはいなく紙がかわりに置いてあった。

> 昨日はありがとうございました。テーブルに朝ごはんを置いておきましたので、食べてくださいね好きな時に帰ってくださいね。私は出かけてきますので、ではまた会いましょうね>

ふむ。ホントにいい子だ。

下に降りて行きテーブルを見るとハンバーグが置いてあった。

美味しいハンバーグをモグモグ食べあまり長居してもよくないと思います。以外に出た。

自分の家の前まで来ると中に入るのが少し引けたが母にバレない様に静かに鍵を開け静かに入った。  
すると目の前に母が立っていた。

「ハハハハ・・・」

「そつた 宗太ああああ！！！！！！！！！！」

3時間後。

「何をしたかわかってるの！？最低よ！？だからあんたって人は。」

× □ 「・・・」

更に二時間後（説教から5時間経過）。

「・・・わかった！？」

「あ、ハイ」

「あ、ハイってあんたね人の話ちゃんと聞いてたの！？そういえば2年前も □ ○ × ・ ・ ・」

2年前のこと持ち出されてもなあ・・・。

更に3時間後（説教から8時間経過）

「ゼエゼエハアハア・・・わかった!!?」

「ハイ」

疲れてんならもういいだろ？

どんだけ説教してんだよおおお

「大体ねえ・・・」

ピンポン

「・・・あら咲姫ちゃんめいが帰ってきたみたいもう二度とこんなことするんじゃないわよ？」

「ハイ、肝に銘じておきます」

ソファーから見える廊下その廊下は玄関とつながっていて玄関から部屋に行ったりどこに行くにしてもこの廊下を通らなくてはいい。

咲姫が廊下を通るのが見えた。

目は髪で見えなかったが悲しそうだった。

咲姫は2階に行ってしまった。

僕は痺れた足を引きずり咲姫の部屋に向かった。

- - -  
- - -  
- - -  
- - -

どうも青木光あおきみつです。

皆さんお元気ですか？

季節の変わり目は風邪をひきやすいて言いますから気をつけましょ

うね。  
ではまた明日  
♪

### 13ビット 私だけのもの

痺れた足をひきずり3階の咲姫さきの部屋の前に着いた。

扉には「ノックしてから入ってねっ」と可愛らしい字で書いた掛札が掛けてあった。

2回ノックをし、入るよと言って扉を開けた。

咲姫は奥の部屋のベッドで寝ていた。

ベッドの傍にあった椅子に腰をかけて。

可愛らしい寝顔を眺めた。

頭を撫でると気持ちよさそうに「ん」と言った。

少し経つと咲姫は目をあけた。

「きゃあああああああああああああああ！」

え？え？え？E？E？E？E？

「どうしたのおおお！！！！」

母がすごいスピードで階段を駆けてくる音が聞こえる。

僕はクローゼットの中に隠れた。

「咲姫ちゃんん？」

キキーっ部屋の前でブレーキ音が聞こえた。

バタンッ！

「どうかした咲姫ちゃん！？」

「い、いえ勘違いだったみたい」

「ホントに？何かあったらすぐ言ってね。おばさん飛んでくから」

飛ぶって、今頃そんなこと言うか？

「はい」

「じゃ、おばさん晩ご飯の続き作るからね」

「はい・・・あっ今日の夕食はなんですか？」

「フフ・・・咲姫ちゃんの好きなオムライスよ」

「やったー」

そう言い母さんは下に降りて行った。

少し経つと「もう行ったわよ」と咲姫が小さな声で行った。

「うん」と言いクローゼットの中から出た。

「で？何？」

冷たく言われる。

「あ、昨日帰ってこれなくてごめん・・・」

「別に朝帰りつてのは少ししか怒ってないの」

「ハイ」

強く言い返せない。

「私が怒ってるのは・・・ねえ？」

「ハイ」

「昨日、羽海<sup>うみ</sup>の所に泊まったんでしょ？」

「・・・ハイ」

「そこが許せないのよ」

「すみません」

「お兄ちゃんは・・・私だけのものだからねっ！そこを自覚してもらわないと・・・困るわよ」

「え？あ、ハイ」

かわゆすなあ・・・。

「まあ今回はこの前助けてもらった件もあるから許すわ」

「ありがとうございます」

「じゃっ行っていいわよ」

「ハイ」

部屋を出る前にもう一度謝っておこう。

「咲姫・・・」

「何よっ」

「・・・ごめんな」

そう言い出た。

ふうこの心を癒す為に二次元に飛ぶか・・・。

咲姫視点。

「あ、あんな事言われたら許すしかないじゃない」  
顔を赤らめてそんなことを思う。

「今日羽海から聞いたからなあ……。」

2時間前バレエ部終わり。

渋谷を羽海と一緒に歩いている。

「ねえ。羽海昨日お兄ちゃん帰ってこなかったんだよ！酷いよね！？」

「あれ？先輩言ってなかったの？」

「え？」

「昨日私の家に泊まったんだよ？」

「ええええええええええ！」

不覚にもかなりの大声を出してしまったと私も今思う。

「ああ〜ふむふむ」

「どうしたの??」

「ねえ羽海」

「何？」

「あんたお兄ちゃんの事好きでしょ？」

「え……。」

シシシ羽海のやつ顔を赤くしてる。

「ど、どうして？」

「昨日バレエ部お腹痛って言ってわざわざ休んだのにお兄ちゃんを泊めるなんておかしいじゃない？」

「はう……。」

「でもお兄ちゃん私のものなんだからねっ！」

「はう……それは卑怯ですよ……。」



## 14 ビート 違い

水曜日。

学校でいつも通りの日々を過ごしてた中。  
給食になった。

今日は天井だ。

このタレとご飯との味が最高だ。  
給食が終わるとお昼休みに入る。

休み入ると本を読み始めた僕。

誰かが話しかけて来た。

「何、読んでるの？」

僕が最近気になってる富山とやまさんだ。

「あゝ本だよ、本。」

「見ればわかるよ」

そう言うとな彼女は少しふくれて見せ、また話しかけてきた。

「宗太そうたくんはいつも本読んでて偉いね」

「ん。偉いって訳じゃないと思うよ」

読んでる本が本だしな。

「富山さんは本とかあんま見ないの？」

「んゝ割と見ないかも」

そう言うと言葉を更に続けてきた。

「ねえ、宗太くん」

「はい？」

「私たち友達だよね？」

買い物にも行っただし友達なのかな？

「そうだね」

「だったらさ・・・あのさ・・・」

「うん」

「麻理まりって呼んで？」

「え??あ・・・うん」

「ホント??やったー」

そんなこと言ったらクラスの男子に睨まれるのではないだろうか、  
という不安を胸に今度から呼ぶことに決めた。

「じゃっ友達と図書室に行ってくるね」

「いつてらっしやっい」

疲れたなあ

「・・・美少女・・・」

瞬時に僕の美少女センサーがその言葉を聞きとった。

「何かさゝこの前転校してきた1年の美少女って噂のやつが今2階  
に来てるらしいぜ?」

「マジかよ?じゃあ俺髪分け目整えとかないとな・・・あと香水  
も」

「お前にくるわけじゃないだろおゝ「シュツ」うわお前ラベンダー  
かよ」

「ラベンダー好きだからいいだろ」

そつえば見に行こうと思って行くの忘れてたな・・・

「宗太~~~~!」

クラスの男子から呼ばれる声がする。

「可愛い子がお前を呼んでるぞ」

おいおい・・・

このタイミングでこれはマズイだろ。

「あ、うん」

まともに喋ったこともないクラスメイトにそんなことを行って入り  
口に向かった。

耳には色々な言葉が聞こえてきた。

「・・・うわさっきの美少女じゃね?・・・」

「・・・嘘だろ。俺のラベンダーの香水返せよ・・・」

「・・・宗太っておとなしそうで結構やるじゃん・・・」

「・・・宗太キショッ・・・」

最後のはお前の方がキシヨいよとツツコミたい太田だ。ふとだ

つてカ今時きしよいなんて使わねえだろ。

そんな言葉に耐えつつ廊下に出た僕は目の前の人に目を疑った。  
咲姫さきだった。

「なんだ咲姫か・・・」

そりゃあ確かに美少女だが・・・。

「なんだって何よ」

口を尖らせこちらを見てくる。

「いやいやごめんごめん、誰が来たのかと思ってさ」

そう言々と咲姫は尖らせていた口を戻しこちらを見つめてきた。

「で、どうかした？」

話を元に戻すと咲姫は口を開いた。

「あ、あのね・・・」

「うん・・・」

5分ほどたわいもない話を話すと咲姫は教室に帰って行った。

席に着くと小説をまた読み始めた。

2つ気になるのだが。

1つ目。

このクラスメイト特に男子からの痛いほど突き刺さる視線。

なんだよ。僕が何か悪いことでもしたっていうのかよ。

2つ目。

咲姫と5分喋っていたが、いつもと様子が全然違っていたこと。

これは何かがおかしいぞと思い、ずっと考えていたが終わらなかった。

そんなことを考えているうちに学校は終わってしまった。

まあ家に帰ったら聞いてみるとするか。

- - - -  
- - - -  
- - - -  
- - - -

どうも青木光あおき こうです。

昨日は私情で休んでしまいましたすみませんでした。

出来るだけ休まないようにはしますが休む時があるかもしれません。  
その時は温かい目で見てやってくれたら幸いです。

ではまた明日♪

## 15ビート 告白

家に帰り妹の咲姫さきの帰りを待っていると咲姫はバレーがあるのではないのか、と気づいた。

バレーがあるとしたら帰ってくるのは早くても5時らしい。それまで何をして待とう。

何て考えている間、母の眞理子まりこが買い物から帰ってきた。

「あら宗太そうた帰ってたのね」

宗太そうたつてのは・・・僕だ。

「あ、うん今日は学校が早く終わったからね」

母は僕の顔をしばらくうかがい何？と聞くと

「何か考えてた様だったから、まさか咲姫ちゃんのことかなあ？  
？この変態」

母は面白おかしく言うと言い物袋の中身をしまい冷蔵庫に向かった。

「ち、違うよっ！」

そう言うと言所の近くからフッフという笑い声が聞こえてきた。

あ、あいつバカにしゃがってええ。

的をえられているのが更にいらつかせる。

4時頃、咲姫をのんびり待っているとガチャツと鍵が開いたような気がして玄関に駆けて行った。

扉が開くと咲姫がひょっこり出てきた。

出てきて早々。

「きゃあっ！ビックリしたなあ・・・。な、なんているのよ」  
と言われた。

「き、聞きたいことがあったからさ」

「な、何？」

「後で部屋に行くよ」

「わかった」

よし、後は晩ご飯食べてからでも行けばいい。

夕食後。

僕は咲姫が部屋に行ったのを見計らって5分後に咲姫の部屋に向かった。

いつも通り「ノックしてから入ってねっ」の掛札。

ノックに2、3回してからドアのあけた。

姿が見えなかったので「咲姫？」と呼んでみた。

すると「こっちこっち」とベッドの方から聞こえてきた。

ベッドに行くと布団を被り顔も体も見えない咲姫がベッドにうずくまっていた。

話しかけてもいいのだろうか？いいよな？

「な、なあ咲姫」

と聞いてみると早く返事が返ってきた。

「な、何よ？」

「あ、あのさあ今日昼休みの時少し話たろ？」

「うん」

「あの時さ、何かいつもと違うなあって思ったんだけどさ何かあった？」

「・・・無言。」

付け加えてみるか。

「べ、別に勘違いならいいんだよ？そうだよなきつと勘違いだよな？」

「・・・誰にも言わない？」

「あ、ああ」

少し経つと彼女は布団の中でこもった声で話しかけてきた。

「2時間目の音楽の終わりに同じクラスの人に、告白された・・・」

「え？」

あえてもう一度言おう。

え？

「ど、ど、どんな奴？」

「顔は結構かつこいい。頭もいいらしいし。性格もよさそう」

「そ、そうなんだ」

「・・・どうしよう？」

「好きになれそうならつ、付き合えばいいんじゃないか？」

「・・・それ本音？」

「あ、ああ」

ぶつちやけ付き合つてほしくないし動揺しまくりだ。

今脈拍を計ったら1分間に150くらいいきそうだ。

大げさすぎたが、ホント動揺している。

彼女は布団から出てきた。

ベッドの上に可愛らしく座り布団にくるまりこつちを見て言った

「私の気持ちを知つても言えるの？」

こんな時に不謹慎だがホント可愛いな。

「あ、ああ」

長い間の無言。

僕の中では30分くらい経つたのではないのだろうか？という時彼

女は口を開いた。

「・・・そう・・・」

そう言つと部屋を出て行つた。

頭の中で思いが駆けめぐる。

このままでいいのか？咲姫を渡していいのか？義理の妹と言っても

一人の女だぞ？

まるで自問自答するかのように頭の中を質問が回りに回る。

次の瞬間僕は止まってはいられなかった。

咲姫の腕を掴んで引き留めた。

「嘘、ついたよ」

- - - -  
- - - -  
- - - -  
- - - -

どうも青木光<sup>あおきみつ</sup>です。

ついさっき小説のお気に入り登録のやり方がわからなかったのですが、出来るようになりました！！

面白い小説を探してお気に入り登録いっぱいしたいと思いますっ。  
ではまた明日っ♪

## 16 ビート やつと

「ごめん嘘、ついたよ」

僕は今、咲姫さきの腕を掴み引き留めている。

「嘘？」

彼女は少し怒ったような喜んでいるような微妙な表情しこちらを見た。

「あ、うん」

それから思ったことを言った。

「確かに咲姫のことは好きだけど告白された男の子をほっとく訳にもいれないから咲姫にはその男の子に気持ちを伝えてほしい。咲姫が好きになれそうなら付き合っても仕方ないと僕は思う、でも・・・」

「でも？」

「こんな言い方はおかしいかもしれないけど、でも・・・咲姫が他の男の物になるって思うと嫉妬っていうかいらするっていうか胸の中が、痛いんだ」

「で？」

で？って今かつこいいこと言いませんでしたああ！？

「うんと。できれば・・・いつてほしくない」

言つと彼女はふうと大きめのため息をつく

「やつとか・・・」

と言葉を繋げて来た。

「ふおおえ？」

と間抜けな言葉を言ってしまった。

「やつと本音を言ったかって言ってるのっ！」

怒っちゃったか？

「私は本音が聞きたかったただだから」

「え？じゃあ嘘なの？」

「こ、告白されたって話はホントよ。まあ最初から断るつもりだったけどね」

「そうなの!？」

「まああの時引き留めてくれなかったらわからなかったけど」

「・・・私はお兄ちゃんがいれば誰もいらないうっていつも言うてるでしょ・・・?」

「あ、はい」

こうして仲は（更に？）深まって無事に幕を閉じたのだった――

「あ、そういえば」

「どうした？ 咲姫」

「あのさ犬でチワワって可愛いよね？」

「あ、そうだね」

「ドゥ」

「うん」

「一緒に買いに行こ？」

「え？これから！？」

「あ、当たり前でしょっ！」

が  
平

和はまだ来そうにもない。

[illegible]

あおきこう  
どうも青木光です

この頃皆さんはハマってるものとかありますか？

僕は顕微鏡で色々な物を見るのはまっってます（笑）

顕微鏡で色々な物を見るとミクロにみれて勝手に「お〜」とか言  
ってます（爆）

毎日バカっぽい毎日を過ごしています。

ではまた明日〜

## 17ビート ピンチ

咲姫さきと一緒に咲姫ワガママの要望に応えペットショップに向かって歩いていった。

その途中。

「あつたこやきだゝ買ってゝ？」

「あ、トリプルアイスだ゠買って？」

「あ、私が探してた雑誌だ゠買って？」

「あ、欲しかったワンピだ゠買って？」

ピンチピンチピンチピンチピンチ。

この子のおかげで財布の中身が消し飛びそうだよ  
それからしばらく歩き。

「ねえお兄ちゃん」

「ん？」

「あの・・・電子辞書買って？」

「もうお金がなくなりそうなんだよなゝ」

「買って？」

「ハイ、買わせていただきます！」

ああああああああああああああ何言ってるんだよ僕は！  
自分でお金を捨てました。

まあ・・・安ければいいけど。

ゆおお、ゆおあんまんぬわあななせえんごひいやあくえんんんん！

！！？？？（47500円）

高い高い高すぎる。

誰か助けてくれえゝ。

これ以上余計な買い物をしないように耳栓を購入し早足でペットショップに向かった。

後ろからは何か聞こえてくるが気にしないことにしよう。

数分後。

ペットショップに着くと咲姫が僕の前を歩き店内に入って行った。僕も店内に入ると耳栓を外した。

店からは動物の独特の匂いがした。

「なあ咲姫」

「なに？」

耳栓で聞いてなかったこともあつてか怒って見えた。

「ホントに犬・・・買うのか??」

「あつたりまえでしょっ！」

そう言つと咲姫はとことこと犬のコーナーへ歩いて行った。はあとため息をつきその後を追った。

咲姫の元へ行くと咲姫は悩んでいる様子で犬を眺めていた。

「これもいいしあれもいいし・・・」

「これなんていいんじゃないかな??」

安めのチワワを指さした。

「そのことなんだけど、チワワもいいけどトイプードルとかもいいのよね・・・」

高い、どれも高すぎる・・・。

30分後。

「これに決めたっ!!」

咲姫が選んだのはチワワでも、トイプードルでもない柴犬だった。

「え?チワワじゃないよ?」

「私が決めたんだからいいのっ！」

値段は9万8千円とそりゃあまあ高いが我慢することにした。

「あ、そうだエサも買わないとね。まあ他にもいっぱい買う物はあるけどとりあえずエサを買いましょう」

そう言つて3100円の高級フードを買わされた。

レジに持つて行き会計をしていると。

「10万1100円になります」

渋々払っていると店員はニコツとして更に言ってきた。

「1万円で1枚福引き券を差し上げております」

と言われて10枚の券を渡された。

咲姫はそれを見て目を輝かせていた。

柴犬をケージに入れて落とさないように運び福引き所に向かった。  
近くまで行くと活気のいい声を張り上げていた。

「福引き券1枚で福引き1回できるよ!!何と!!今話題沸騰中の  
大人気漫画!「恋するクルクルバーガー」も置いてるよ!!さあ今  
すぐ買い物だあ!!」

おっあの漫画見たかったやつじゃん。

「よし咲姫いつちよやりますか」

「お兄ちゃん10回引いてきて」

「え?いいのか?」

「うん・・・何か恥ずかしくて・・・・・・・・・・」

「そ、そうか」

咲姫から渡された10枚の福引き券を手には福引きの列に並んだ。  
前の5人はティッシュをばっかりだった。

「10回お願いします」

「お!いっぱい買い物したね!!」

したってどうかされた。

10回分の結果が出る。

ティッシュティッシュティッシュクルクルバーガー(6巻)ティッ  
シクルクルバーガー(6巻)ティッシュティッシュクルクルバー  
ガー(6巻)

なんで全部6巻なんだあああああああああああああああ  
景品が置いてある所を見ると「恋するクルクルバーガー」の所に6  
巻がずらりと並んでいた。

最後の一回か・・・よし!

突然耳に言葉が響く。

お、  
なんだなんだ。

よっしやあああ！！！！

「この福引き所が始まって以来初めての特賞なのでサービスでもう

ありがとうございます。と軽く一礼してからもう一度回した。

「おおおおおおお！またまたおめでとございます！」

あまり感情を表に出さない性格だがこの時はテンションが上がってし

後ろからはスゲーよアイツだとか福引きってホントに当たるのね、

正直・・・気持ちが良い。

なんだ？なんだ？とその場にいる全員が耳を傾ける。

その場にいた全員が静まりかえった。

僕はその本1巻も持っていないんですけどおおおおおおおお

おお！！！！？？？？

[illegible]

[illegible]

この頃、学校で小説を読むのに夢中です（笑）

読んでいる本は、ファンタジア文庫さんの「RPG W（・・）」

「RLD1-ろーぷね・わーど」です。

いやあ面白いですね。

ハトル系のはあんまり好きじゃなかったのですがこの本は凄く好きになりました。

全巻読破できるかな？

ではまた明日〜

## 18ビート 出費

木曜日。

いつものように学校に行き家に帰った僕はソファ―に座り義理の妹にあたる咲姫さきの帰りを待っていた。

というのも昨日咲姫が・・・。

「明日を楽しみに待ってなさいっ!」

と言い勝手に部屋に入ってきて勝手に部屋から出て行ったのだ。

そう考えていること10分。

ピンポーン

チャイムが来た。

迎えに行き扉を開けた。

おかえり、僕のバラ色の人生。

おかえり、僕の美少女。

おかえり、This wonderful day（素晴らしいこの日）。

「宅配便です」

「って宅配便かよおおお!!」

勢いあまり絶叫しそこにあったペン立てを床に叩きつけた。

「は？」

と宅配便のお兄さんに言われたが僕は気持ちを立て直し荷物を見た・

・

・・・がお兄さんは何も持つてはいなかった。

「あれ？荷物は？」

ハンコを持ちながら問いかける。

「あ、はい今持つてきます」

荷物を持つてこなかったなんて若いみたいだし新人さんかな??

次の瞬間僕の目に映ったのは想像にもかぬ大きさの荷物を抱えたお兄さんだった。

「お荷物は着払いになつておりますので、14万6千円になります」  
「あ、はい……. いいiiiiiiiiiiiiiiii!?!?!?」

「?!?!?!?!?!?」  
「そんな金はないぞ?」

「……. 仕方がない母に借りて今度返すか…….」

母のヘソクリの在処を知っていた僕はまるで泥棒かのように素早く  
お金を抜き取りお兄さんに渡した。

それを受け取ったお兄さんは4000円を置き次の宅配場所へと向  
かっていった。

てか14万つて僕のお小遣い2、3ヶ月分だよおおおおい——  
li——.il——li

更に待つこと30分。

1つの考えに行き着いた。

面白いつてのはこのことか?

僕の哀れな姿を目にして面白がるうってことか?

だとしたら…….。

ともかく咲姫の帰りを待つしかない。

更に待つこと30分。

咲姫はようやく家に入り顔を出した。

「届いてた?」

着いてからいきなり何事も無かったかの様に喋りかけてくる。

「おい咲姫これはどういうことだよ」

3つも4つもある箱を指さし問いかけた。

「お、届いてる」

「質問に答えろよ」

「やだ、お兄ちゃん怒ってるの?」

「当たり前じゃあああああああ!?!?!?!?!」

咲姫に怒ったのは初めてだ。

- - - -  
- - - -  
- - - -  
- - - -

どうも青木光<sup>あおき こう</sup>です。

今日オークションで落札した商品が届きルンルン♪な俺です。

小説の中で僕で現実では俺で何か言いにくいです。

今度書く小説は俺にしよう・・・。

次かく小説はバトル系に挑戦してみたいと思います。

ではまた明日♪

## 19 ビート 冗談

「14万だぞ！？14万！！」

怒っている僕は張本人の咲姫さきに怒りをぶつけた。

「あー、ごめんごめん」

「軽いいいいいい！！！！！！」

さつきからずつとこの調子だ。

「とにかくまずこれなんなんだよ」

「何ってPCだけど？」

「2台買ったから1台お兄ちゃんにあげるね」

「お、ありがとう・・・っておい！」

「だって～PCはあった方がいいでしょ～情報社会としては」

「そもそもPCはあるだろ？」

「どこに？」

「僕の部屋に」

「だって～・・・」

聞くのは嫌だが。

「だって何だよ？」

「お兄ちゃんエロいし・・・」

「エロくねえええ！」

「だってこの前画面見たとき変なの見てたし」

「あれは誤解って言っただろ？」

「履歴見たらあんなのばかだったって言ったでしょ？」

「何回も間違えて見ちゃったんだって言ったろ？」

「嘘ばっか」

「嘘じゃないよ」

「嘘よ」

「嘘じゃない」

の会話が何度も続く。

そんな時。

「ただいま、あら何コレすごい荷物ね。・・・」

母が帰ってきた。

つておい！あそこにはまだ領収書が！！！！

玄関に出たところでもう遅かった。

母は領収書を手にとりこちらを睨みつけてきた。

「宗太くん？このお金どこから出たのかな？？」

即座にひざまずき土下座をし、謝った。

「さ、咲姫が勝手に頼んだんだ。僕は何も知らなくてそれで……それで……」

必殺・悲劇のヒーロー。

それでも小学校の時は演劇に通っていたんだ（2日で逃亡）。

「人のせいにするんじゃないありませんっ！ちよつと着なさい」

えりを捕まれ引きずられる僕。

そうだったこの技は何度も母に使っていてバレバレだった。

ソファに座らされた（放り投げられた）僕はソファに座り母の言葉を待った。

「今日の……」

「はい」

横には咲姫もいる。

「今日の・・・晩ご飯カレーとラーメンどっちがいい？」

母よあなたはどくなされたのでしょうか。

[illegible]

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

どうも青木光です。

今日昼ご飯にラーメンを食べに行きました。

醤油ラーメンを食べました。

醤油ラーメンって・・・・・・野菜まったくないですね。

話はかわりますが今回でこの話を終わらせたいのですが終わらせれ  
ませんでした。

理由は・・・。

妹がいちいち見にくるから！！！

もちろん美少女ではありません。

美少女だったらどんなにいいことか・・・orz

ではまた明日~~~~~  
♪

## 20ビート 説教

「まあ今のは冗談だけど・・・」

母はふざけたような冗談をかまし説教を再開。

「お母さんはね？別にヘソクリを使ったことに怒ってるんじゃないよ？その曲がった根性に怒ってるの！」

いやいや。

絶対ヘソクリで怒ってるよね。

顔に書いてありますよ。

ソファーに投げられた僕は洪々説教を聞いていた。

「大体宗太！あんたは何偉そうにソファーに座ってるの！床に正座しなさい正座！！」

あんたが投げたんだろ。

一緒に怒られている咲姫さきは自分も言われる前にササツと床に正座した。

こいつ・・・。

また母に何か言われる前に正座すると母はよしと言わんばかりに説教を再開した。

30分後。

足も痺れてきてなかなか終わらない母の説教。

昔からそうだ。

一度始めると気が済むまでやる母はこういう家系に生まれきたことのできる方針だろう。

おかげで。

1度読んだら面白くても面白くなくても最後まで読まないと気が済まない母。

おかげですごい本の数。

趣味も1度始めたら止まらない。

友達に釣りを勧められて始めたら毎日毎日そりゃあまあ飽きるほどに釣りの毎日。

そんなことを考えてふと咲姫の方を見ると、足を崩しまっすぐに足を伸ばし伸びまでしてるではないか!!

母の目を見ると咲姫の足を見ても何とも言わなかったので僕も伸ばした。

「宗太ああああああああああああああ!!!!!!!!!!」

「ぎゃああああああああああああああああああああ!!!!!!!!!!」

びつくりしたあああ!!!!  
いきなり発狂したかと思っただよ!!

「何々!!」

「人が説教してる時に足崩すとは何事よ!!」

「そんなこと言ったら咲姫だって崩してるだ……」

咲姫の方を見ると正座をしている……!

咲姫はこっちを見て

「言いがかりつけるなんてお兄ちゃん酷い!!」

バカめ!

母さんはお前が足を崩しているのを見てたぞ!!!!!!!!

「そうよ、何言いがかりつけてるのよ宗太!!」

おいおいおいおい。

アンタは見てたよな?おい!

駄目だ……この2人つるんでる……。

よし、たまには……。

「2人とも酷すぎだよ!!!!」

玄関に向かつて逃げる。

「あ、こら宗太待ちなさい」

外に出てこんなこともあるつか、とポケットに隠しておいた自転車の鍵と財布を持ち逃げる。

とりあえずコンビニかな。

コンビニに行きパンとカラツカラの喉を潤す為にお茶をかう。

ちよつと遠くのゲーム店に行ってレンタルが出来る漫画の立ち読みを始める。

2時間くらいしたら帰るかな。

2時間くらいして疲れた腰と首を気づかいながら家に向かう。

家に着くと家は静まっていた。

怖いなあ、とは思いつつも中に入る。

真つ暗・・。

誰もいせんよと言わんばかりに静まっている。

まさか探しに行ってくれたのかな？

何て考えている中

**ガタンゴトンガタン！！！！！！！！！！！！！！！！**

もの凄い音。

上から聞こえた様だ。

僕は静かに階段を上る。

|     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|
| 1   | 1   | 1   | 1   |
| 2   | 2   | 2   | 2   |
| 3   | 3   | 3   | 3   |
| 4   | 4   | 4   | 4   |
| 5   | 5   | 5   | 5   |
| 6   | 6   | 6   | 6   |
| 7   | 7   | 7   | 7   |
| 8   | 8   | 8   | 8   |
| 9   | 9   | 9   | 9   |
| 10  | 10  | 10  | 10  |
| 11  | 11  | 11  | 11  |
| 12  | 12  | 12  | 12  |
| 13  | 13  | 13  | 13  |
| 14  | 14  | 14  | 14  |
| 15  | 15  | 15  | 15  |
| 16  | 16  | 16  | 16  |
| 17  | 17  | 17  | 17  |
| 18  | 18  | 18  | 18  |
| 19  | 19  | 19  | 19  |
| 20  | 20  | 20  | 20  |
| 21  | 21  | 21  | 21  |
| 22  | 22  | 22  | 22  |
| 23  | 23  | 23  | 23  |
| 24  | 24  | 24  | 24  |
| 25  | 25  | 25  | 25  |
| 26  | 26  | 26  | 26  |
| 27  | 27  | 27  | 27  |
| 28  | 28  | 28  | 28  |
| 29  | 29  | 29  | 29  |
| 30  | 30  | 30  | 30  |
| 31  | 31  | 31  | 31  |
| 32  | 32  | 32  | 32  |
| 33  | 33  | 33  | 33  |
| 34  | 34  | 34  | 34  |
| 35  | 35  | 35  | 35  |
| 36  | 36  | 36  | 36  |
| 37  | 37  | 37  | 37  |
| 38  | 38  | 38  | 38  |
| 39  | 39  | 39  | 39  |
| 40  | 40  | 40  | 40  |
| 41  | 41  | 41  | 41  |
| 42  | 42  | 42  | 42  |
| 43  | 43  | 43  | 43  |
| 44  | 44  | 44  | 44  |
| 45  | 45  | 45  | 45  |
| 46  | 46  | 46  | 46  |
| 47  | 47  | 47  | 47  |
| 48  | 48  | 48  | 48  |
| 49  | 49  | 49  | 49  |
| 50  | 50  | 50  | 50  |
| 51  | 51  | 51  | 51  |
| 52  | 52  | 52  | 52  |
| 53  | 53  | 53  | 53  |
| 54  | 54  | 54  | 54  |
| 55  | 55  | 55  | 55  |
| 56  | 56  | 56  | 56  |
| 57  | 57  | 57  | 57  |
| 58  | 58  | 58  | 58  |
| 59  | 59  | 59  | 59  |
| 60  | 60  | 60  | 60  |
| 61  | 61  | 61  | 61  |
| 62  | 62  | 62  | 62  |
| 63  | 63  | 63  | 63  |
| 64  | 64  | 64  | 64  |
| 65  | 65  | 65  | 65  |
| 66  | 66  | 66  | 66  |
| 67  | 67  | 67  | 67  |
| 68  | 68  | 68  | 68  |
| 69  | 69  | 69  | 69  |
| 70  | 70  | 70  | 70  |
| 71  | 71  | 71  | 71  |
| 72  | 72  | 72  | 72  |
| 73  | 73  | 73  | 73  |
| 74  | 74  | 74  | 74  |
| 75  | 75  | 75  | 75  |
| 76  | 76  | 76  | 76  |
| 77  | 77  | 77  | 77  |
| 78  | 78  | 78  | 78  |
| 79  | 79  | 79  | 79  |
| 80  | 80  | 80  | 80  |
| 81  | 81  | 81  | 81  |
| 82  | 82  | 82  | 82  |
| 83  | 83  | 83  | 83  |
| 84  | 84  | 84  | 84  |
| 85  | 85  | 85  | 85  |
| 86  | 86  | 86  | 86  |
| 87  | 87  | 87  | 87  |
| 88  | 88  | 88  | 88  |
| 89  | 89  | 89  | 89  |
| 90  | 90  | 90  | 90  |
| 91  | 91  | 91  | 91  |
| 92  | 92  | 92  | 92  |
| 93  | 93  | 93  | 93  |
| 94  | 94  | 94  | 94  |
| 95  | 95  | 95  | 95  |
| 96  | 96  | 96  | 96  |
| 97  | 97  | 97  | 97  |
| 98  | 98  | 98  | 98  |
| 99  | 99  | 99  | 99  |
| 100 | 100 | 100 | 100 |

あおきこつ  
どうも青木光です。

こんばんは。

いきなりですが僕の好きな小説がもう一つあります。

この前ファンタジア文庫さんの「RPG W（・・）RLD 1 -  
るーぷれ・わーど」を紹介したと思うのですがもう一個好きな  
のがありました。

実質これが一番好きです。

ファミ通文庫さんの「バカとテストと召喚獣」です。

これは知ってる方も多いかと思います。

あの書き方が好きなんでしょうね、きつと。

ホント面白いと思います。

ではまた明日ゝゝ

## 21ビット 弱点

2階の咲姫さきの部屋に向かって歩いてみるとガタンゴトガタンゴトンと音がした。

ドアを少し開け半目で部屋を覗くと咲姫と母さんが何かやっているのが見えた。

こちらに背を向けて何かをしている。

ああ気になる。

すぐ気になる僕にとっては苦痛だ。

あゝもういいや！

扉をバタンと開けると母さんがこちらに気づきダンッとしち上がった。

ああ気になりますよ説教でも何でもうけようじゃないの！！

「そつた宗太・・・」

・・・とりあえず怒鳴ると見た。

「おかえり〜」

「は？」

怒鳴られると思って構えていたが拍子抜けだ。

「それより宗太手伝つてよ」

気になっていた物はPCだった。

ああそつたええ言つてたな。

「電源押してもつかないのよ」

「コンセントも何も設定もしてないのにつくわけないだろ！！母さんも僕の部屋のところ一緒にやっつたら！？」

「あら。そうだったかしら？」

そんな覚えはないと言わんばかりに首を傾げた。

2時間後、無事に電源もつきリビングにいき1息ついた。  
束の間のことだった。

「宗太~~~~！」

と呼ぶ声。

「早くきてよ~~~~」

うるせ〜せかすなよ。

2階へ行くと母さんは僕を見るなり。

「ちよつと宗太矢印が動かないの〜」

「・・・矢印って・・・」

矢印ってのはマウスポインタの事だ。

見ると若者の咲姫も一緒になって。

マウス本体を画面に押しつけて動かしていた。

「おいおいおい、何のコントだよ・・・」

母さんと咲姫は「は？」という顔をしてこちらを見ている。

「マウスはこのマウスパッドの上に置いて動かすんだよ」

僕はお手本を見せた。

すると画面に映ったマウスポインタはすいすい動いた。

「っていうかさ」

2人ともこちらを見た。

「まあ母さんは母さんだから仕方ないけどさ、咲姫は若者な訳だからPCの使い方くらい知らないのかよ？」

すると咲姫はすぐに反論を始めた。

「べ、別にし、知らないって訳じゃないのよ！？ただ苦手ってだけなんだからっ！！」

反論と言うには実に非力だが。

母さんを見ると気にさわつたらしくムクツとしてた。

「大体PCが何よ私だってそれくらいできるんだからゴニョゴニョ・・・」

咲姫は何かぶつぶつ言っている。

「母さんは母さんだから仕方ないって言い方ないじゃない大体ねえ・・・ゴニョゴニョ・・・」

母さんも何か言っているようだ。



まあ日々悩んでいます。

唐突ですが告白って嫌ですね。

そりゃあOKなら最高ですがごめんなさいって言われたらそれから会った時どんな顔すればいいんでしょうね。

そんなことを帰り道に思いました。

なんてね（笑）

ではではまた明日〜♪

## 22 ビート 笑顔

月曜日。

「ああ、めんどくせー」

いつも通りの通学路を自転車で駆け抜けてる僕。

近頃は隣が富山とやまさんがいるから学校に行っているようなもんだ。  
ふとだ

太田が隣だったらしの間不登校だな、うん。

学校に着くと富山さんはとくに席に着いていた。

僕も遅い方ではないと思うのだが。

「おはよう」

そう言い僕は鞆を下ろした。

僕に気づいた富山さんは元気に「おはよう」と返してくれた。

「週末はどうだった？」

と話かけてくれた富山さん。

「ん？いつも通りだったよ。特に何もなし」

「そっか・・・」

「うん」と言う僕の目に次に飛び込んできたものは彼女の笑顔だった。

「じゃあさ、今日授業終わったらどっか遊びにいこっか？」

「いや、でも・・・」

「いやとは言わせないわよ？この前の買い物の時埋め合わせは今度するって言ったでしょ？」

「そ、そりゃあそうだけど・・・」

「じゃあ決定ねっ」

そんな所を誰かに見られたら・・・。

あいつらは付き合ってるんじゃないか？

宗太程度そうたがあその富山さんと付き合うとは・・・。

ということになる。

出来るならその事態は避けたい。

「あ、でも部活は？富山さんはバレー部なんでしょ？？」

「今日ないから」

グハッ！

僕の逆転の一撃が返された。

「じゃ、じゃあ何か用事あるんじゃないの？？」

「あつたら誘わないよ」

それもそうだ・・・orz

気付よ僕。

「じゃ、じゃあ・・・！」

「私と・・・行きたくないの？」

「い、いやそ、そういう訳じゃないんだ」

「じゃ、じゃあ行こうよ」

「あ、はい・・・あ」

「やった」

彼女の演技にしてやられたらしい。

授業も終わりとりあえず駅前集合になった。

集合時間15分前に着いた。

「おっそ〜い！」

彼女は頬を膨らませこちらを見ていた。

「普通30分以上早くくるでしょ！」

「そ、そうでもないと思います」

「とりあえず、行こっか」

富山さんに手を組まれた僕はあたふたしてしまった。

向かった場所は映画館。

恋愛映画を見ることになった僕。

平日でまだお昼頃と言うこともあってか人は少なかった。

約2時間半後、映画が終わり映画館を後にした。

富山さんは涙ぼろぼろだった。

88

ではまた明日〜  
♪

## 23ビット 探り合い

「何してんのよ・・・」

咲姫は怒っていますオーラを漂わせこちらを睨んでいる。

「こ、これは仕方ないんだよ!」

「何が仕方ないのよ」

「咲姫がからまれた日に途中で抜けちゃったから仕方なくんだよ」

「私と約束しといてその女ともしてたんだ・・・」

咲姫は僕と富山さんを一瞥するように睨みつけた。

と、富山さんは悪くないんだ・・・orz

「話の邪魔をするけどあなた誰なの?」

富山さんが割って入った。

「名乗らせる前に自分から名乗ったらどうなの?」

言葉に怒りがこもっていて怖い・・・

「私は富山麻理。宗太くんのクラスメイトだけど?」

「勝った。私は葛城咲姫、葛城宗太の妹よ」

「え? 宗太くん妹いたの??」

「あ、うんまあ・・・」

そうか富山さんは知らなかったもんな。

「それよりあなた何なの? 勝ったって。妹だからって何なのよ。そもそも兄妹では付き合ってはいけないのよ? あなたの土俵にのるわけじゃないけど、その時点で私の勝ちだと思っけど?」

と、富山さんが怒っているように見える・・・!!  
怖ええ。

「残念だけどあなたより私の方がお兄ちゃんのことは何百倍も知ってるわ。それに本当の妹じゃなくて義理だもん。付き合う権利はあるわよ」

「そんなこと言うなら私にだって学校の一面とかあなたの知らない部分はあるわよ」

「なんですって?」

「なによ」

2人はいがみ合いをし始めた。

よし、まかせろ。

「よしなよ2人共。仲良く3人で遊ぼうよ。その方が楽しいよ」

「お兄ちゃんは・・・」

「宗太くんは・・・」

「黙ってて!!!!!!」

「ハイ!!」

案外仲いいんじゃないのか?

「そもそもねお兄ちゃん。誰のせいでこうなったかわかってるの?」

「そうよ。何か宗太くんて決断力がないっていうかうじうじしてるのよね」

「あら。あんたも意外とわかってるじゃないの」

「あなたもね」

「お兄ちゃんは前からゴニョゴニョ・・・」

「宗太くんなんて私の気持ちもゴニョゴニョ・・・」

火が燃え移ったようだ。

すごいスピードで僕の繊細なガラスの心は粉々になっていく。

3時間後。

「じゃあね咲姫ちゃん」

「ばいばい」麻理

あの後すっかり意気投合した2人は買い物に行き僕にお金・兼・荷物持ちをさせすっかりルンルン気分だ。

富山さんは家に向かって帰ったようだ。

咲姫は新しい友達も出来たこともあつてか上機嫌だった。

咲姫と富山さんはメアドを交換していた。

「どれだけ仲良くなっとんねん!!!!」

とツツコミたかったがまた放火されそうだったのでやめといた。

家に着き咲姫の部屋に荷物を置いた。

「じゃ僕いくから」

「ありがとう」

# h?

「べ、別に何も言っていないわよ！さっさと行きなさい」

「いゝいゝ」

部屋を出て後ろでに扉を閉めた。

やっぱお礼言われるのは悪くないな。

明日は筋肉痛だろうな。

こんばんは青木光です。

あおきこつ  
こんばんは青木光です。

3日間も小説を休んでしまい本当に申し訳ございませんでした。

急用で北海道の留萌の方に行っておりました。

またこの様なことがあるかもしれません。支えてください。

ではではまた明日〜  
♪

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4654/>

---

ハート・ビート

2010年10月28日08時48分発行